

シンポジウム

第Ⅰ部 基調講演

「鞠智城と古代の西海道」

笹山 晴生（東京大学名誉教授）

講演者プロフィール

笹山晴生（ささやまはるお）

東京大学文学部国史学科卒業。東京大学大学院人文科学研究科修了。

名古屋大学講師、名古屋大学助教授、東京大学教養学部助教授、東京大学文学部助教授を経て、東京大学文学部教授となる。一九九三年、定年退官後、学習院大学文学部史学科教授も務める。東京大学名誉教授。専門は、日本古代史。文学博士。

主な著書に、『古代国家と軍隊―皇軍と私兵の系譜―』講談社学術文庫二〇〇四（中公新書としては一九七五）、『日本古代史講義』東京大学出版会一九七七、『日本古代御府制度の研究』東京大学出版会一九九五など、著書・論文多数。

鞠智城と古代の西海道

笹山晴生

はじめに

鞠智城は七世紀につくられた朝鮮式山城で、福岡県の大野城、佐賀県の基肄城、対馬の金田城などと並ぶ存在である。設置の時期は明らかでないが、文武天皇二（六九八）年条の『続日本紀』に、大宰府に命じて大野・基肄・鞠智三城を修繕させるとあるのが文献上の初見である。その後平安時代の初め、天安二（八五八）年条の『日本文徳天皇実録』に、大宰府からの報告として、五月に肥後国で暴風雨があり、菊池城院の兵庫（武器庫）の鼓がひとりでに鳴り、同城の不動倉（穀を貯えておく倉）十一宇も火災にあつたということが見えている。このほか九世紀の史料に「肥後国菊池郡城院兵庫」（日本三代実録元慶三年三月十六日条）、「菊池郡倉舎」（同貞観十七年六月二十日条）などに見えるのも、みな同じ兵庫や不動倉を指すものと思われる。



図1 講演中の笹山晴生氏

鞠智城の跡は熊本県の北部、菊池市・山鹿市にあり、平成十六（二〇〇四）年、「鞠智城跡」として史跡に指定された。近年の発掘調査によって土塁や石垣、城門・倉庫・官衙施設などの遺構が次々に発見され、全体の構造が明らかにされ、整備も進められつつある。その結果、今まで数少ない文献によってしか推測しえなかった鞠智城の性格がしだいに明らかとなり、その存在意義についてもあらためて問題が提起されることとなった。

鞠智城の歴史的な意義を正しく捉えるためには、鞠智城が設置された当時の歴史的な状況について、九州Ⅱ西海道全体の広い視野から見てみる必要がある。

一 鞠智城の地理的位置

菊池の地は古代律令制のもとでは肥後国菊池郡に属し、古くは「くくち」と訓まれたらしい。鞠智城の跡に立って望むと、東には阿蘇の山並みが連なり、南から西にかけては広大な熊本平野が広がる。西は遙か、有明海を隔てて雲仙を望むことができる。

谷を刻んで西に流れるのが菊池川で、玉名で有明海に注ぐ。この菊池川は、古代における朝鮮・中国からの文化輸入の一つの経路であった。玉名郡の江田船山古墳出土の大刀の銘には、五世紀後半の倭王武（雄略天皇）と推定される「獲加多支鹵大王」（わかたけるのおおきみ）の名が見え、倭の五王時代にこの地の豪族が倭政権と関わりをもっていたことを物語っている。この地域にはまた、山鹿市のチブサン古墳など多くの装飾古墳も見られ、独自の文化の様相を示している。

玉名から菊池にかけての地域は、九州の北部から中部・南部へと至る陸上交通の要地でもあつ

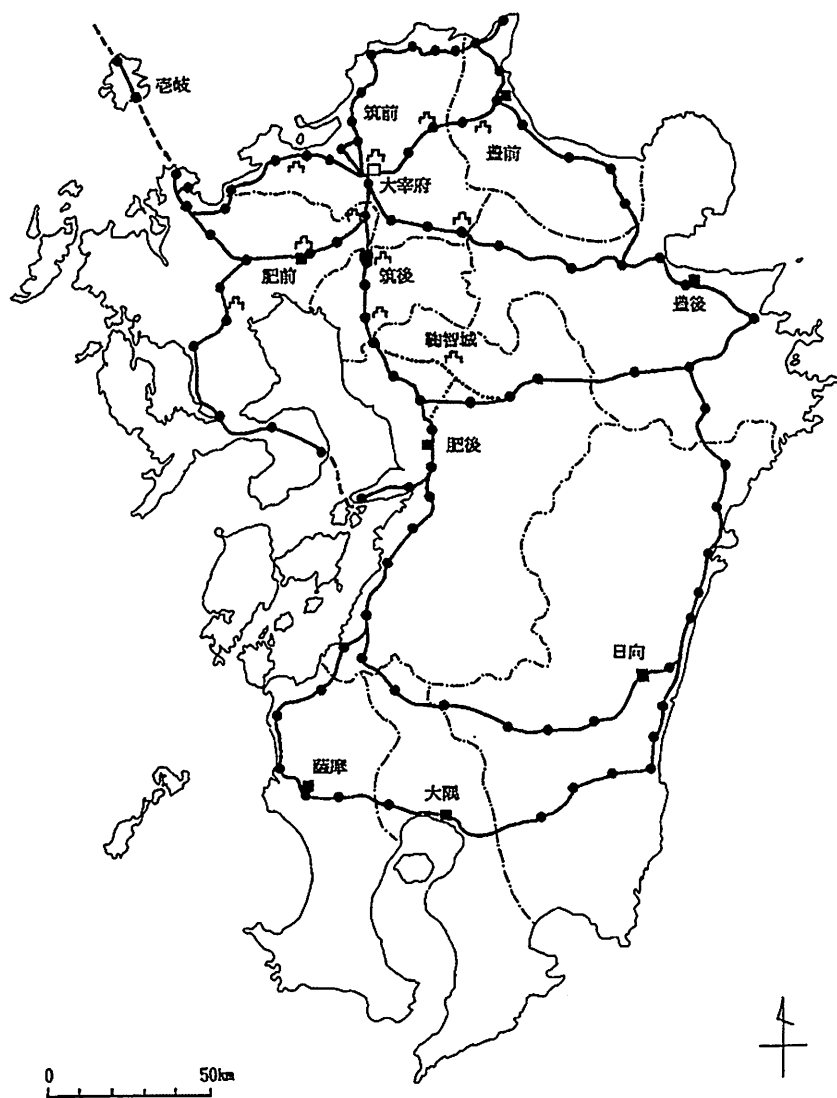


图2 西海道

た。律令時代の官道である駅路は、大宰府から筑後国を経てこの地に至り、熊本平野に入つて、東方、阿蘇を経て豊後国に至る道、西方、有明海を渡つて肥前国に至る道を分け、さらに南下して葦北・球磨などを経て薩摩・日向へと向かつていた（第〇参照）。阿蘇には阿蘇山を神として祀る阿蘇国造があり、葦北の地には有明海を通じて海外とも交渉を行つていた火葦北国造がいて、ともに律令制成立以前には、在地に大きな勢力を有していた。火葦北国造阿利斯登（ありしと）の子日羅は百済の王朝に仕えて達率という高位を得た人であり（日本書記敏達十二年是歳条）、また推古十七（六〇九）年には百済の僧俗八十五人を乗せた船が葦北津に漂着して、葦北の地が大陸との文化的な交渉の上で重要な意味をもつた地であることがわかる。鞠智城の地は、これら肥後の諸地域を押さえる重要な役割をもつた地であつた。

七世紀後半から八世紀にかけて律令国家が成立すると、九州南部の日向・大隅・薩摩から多嶺・屋久・奄美など薩南諸島へと律令制的支配を進めていくことが国家の大きな課題となつた。肥後国はこうした政略を進めていく上での基点としての役割を果たしたものと思われる。薩摩国や日向国の郷名に合志・飽田・宇土・山鹿・八代など肥後国の郡名を冠したものの多いことは、肥後国から多くの人々がこれらの地に移住したことを示すものであろう。

鞠智城は七世紀後半の朝鮮式山城で、大野城や基肄城と同様、唐・新羅の進攻に備えるための防衛施設であつた。それらの中でもっとも南に位置する鞠智城は、おそらく有明海沿岸からの進攻に備えて造られたものであろう。しかし鞠智城はまた、九州中部・南部への交通の要衝に位置する城であり、ことに八世紀以降には、肥後国の政治・軍事を支え、九州南部への律令制支配の拡大を進めるという

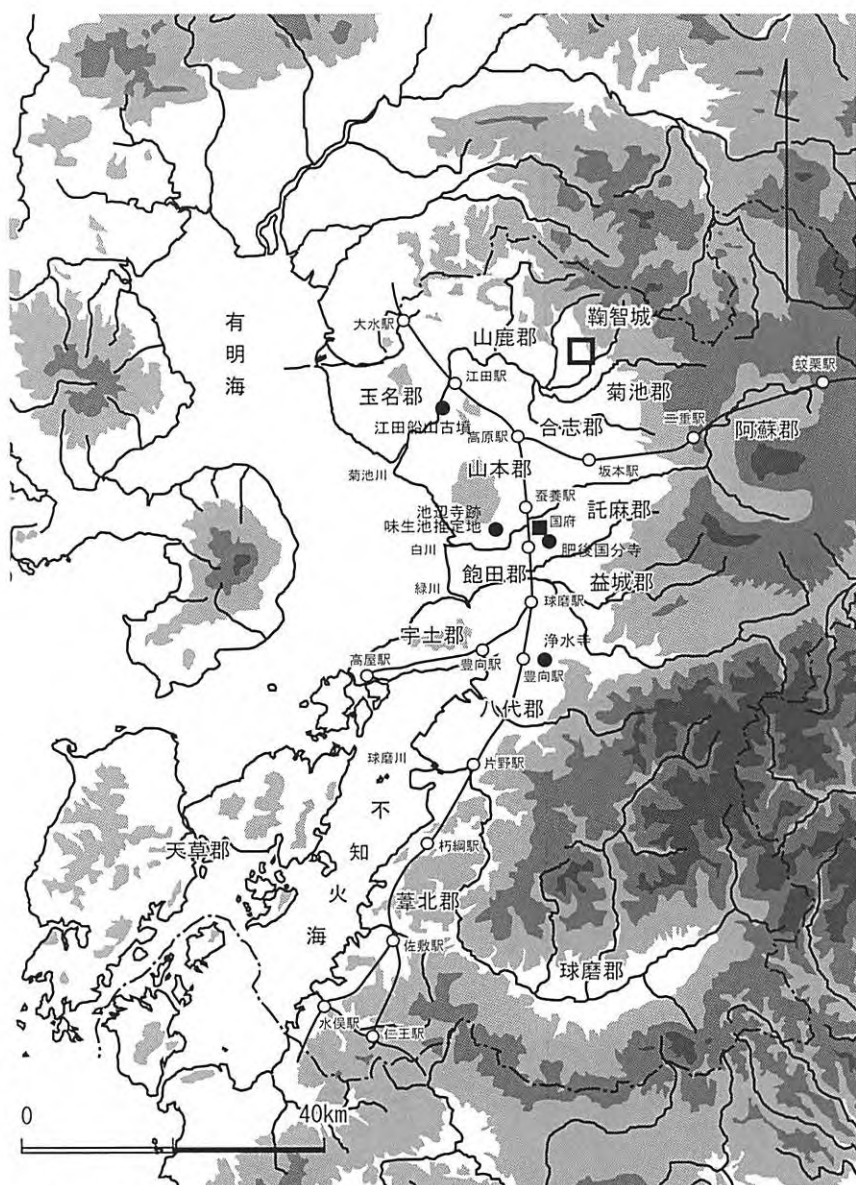


図3 古代肥後の駅路

役割を担う存在にもなっていた。そのことが八〜九世紀を通じて鞠智城が存在し、軍事施設としての役割を果たし続けた理由であろうと思われる。

《葦北出土の駅制関連木簡9》

平成十九（二〇〇七）年十二月、熊本県葦北郡芦北町の花岡木崎遺跡から古代の木簡二点が出土した。熊本県教育庁文化課の調査によるもので、南九州西回り自動車道芦北インターチェンジ建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査中、井戸の底から出土し、その年代は共伴する土器から八世紀末〜九世紀初頭と推定されるという。『木簡研究』三一号に載せる宮崎敬士の報告書によれば、その釈文は左の通りである。

（一号木簡）「×□於佐色□□□□」

（二号木簡）「×発向路次駅□等×」

文中の「佐色」は肥後国の駅名である。延長五（九二七）年奏進の『延喜式』兵部式に肥後国「佐敷（佐色）」駅があり、駅馬五疋・伝馬五疋を置くと定めている。所在地は現在の芦北町佐敷と推定されており、木簡の出土地点に近く、この遺跡は佐敷駅家と関連する遺跡である可能性が高い。西海道（西海道西路）はこの駅の南で、水俣を経由して薩摩国府に至る道と、大隅・日向方面に向かう支路の二手に分かれると推定されており、ここが九州自動車道と南九州西回り自動車道との分岐点に当たっていることと符合して興味深い。「路次駅」の文言からすると、目的地に至る路次の各駅にあて、官人への供給を要請するために官人に携行させた文書木簡であろうかと思われる。

二 七世紀の日本と鞠智城の設置

古代山城としての鞠智城の設置は、七世紀の東アジア・日本（倭国）の情勢と深く関係している。ここではその歴史的な動きについて見てみることにしよう。

七世紀の東アジアは、大きな動乱の時代を迎えていた。中国では六世紀末の隋によって南北両朝が

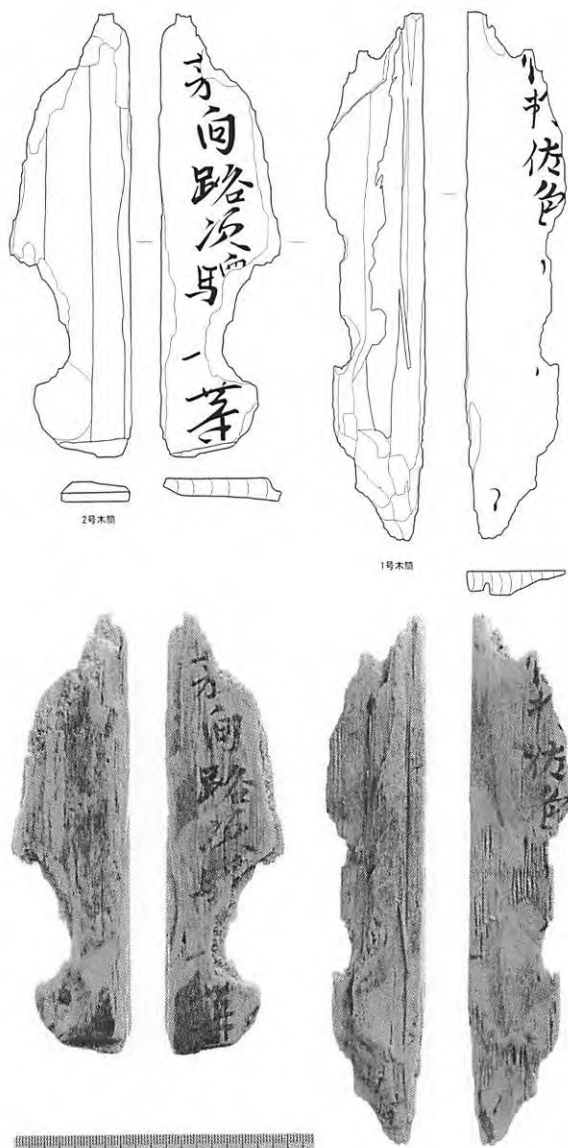


図4 熊本県花岡木崎遺跡出土木簡

再統一され、七世紀には隋のあとを受けた唐の帝国がめざましい発展を遂げて、周辺諸国に大きな威圧を与えた。それに対して、朝鮮半島では高句麗・百濟・新羅の三国がそれぞれに権力の強化をはかり、相互に激しく対立した。

高句麗・百濟による侵略に苦しんだ新羅は唐と連携し、斉明六（六六〇）年、將軍蘇定方率いる水陸十萬の唐軍は、新羅軍と連合して百濟を攻撃した。百濟の王都泗沘城は陥落し、義慈王は逃れて旧都熊津城に拠ったがここも陥落し、国王・太子らは捕らえられて唐に送られ、百濟は滅亡した。

しかし百濟の故地では、その後も鬼室福信らの遺臣が任存山城などに拠って唐軍に抵抗した。福信は倭国に軍事援助を求めるとともに、倭にあつた王子扶余豊（豊璋）を迎えて国王とすることを乞うた。朝廷は遺臣の反乱を援助することに決し、斉明天皇・皇太子中大兄皇子らは九州に赴き、天智元（六六二）年には阿曇比羅夫・阿部比羅夫らを将とする大軍を朝鮮に送り、軍需品を援助した。しかし天智二（六六三）年八月、倭の水軍は劉仁軌らの率いる唐の水軍と白村江に決戦し、兵船四〇〇艘を焼かれる決定的な敗北を喫した。倭軍は百濟の王族・貴族らを伴って帰還し、朝鮮の動乱への軍事的な介入は完全に失敗に帰した。

白村江の敗戦後、天智天皇の朝廷は、唐・新羅の侵攻に備え、西辺の防備を強化するための施策を次々に実施した。天智三（六六四）年以降、朝廷は最前線にあたる対馬・壱岐に防人と烽とを置いて敵襲に備え、大宰府の前面には防御施設としての水城を築いた。大宰府に近接する大野・基肆二城のほか、対馬の金田城、長門、讃岐の屋島、大和・河内国境の高安城など、大和に達する行路の要衝にも城を築いた。これら西日本の城は、大野城・基肆城などの遺跡によって知られるように、山頂の周囲に土

壘をめぐらし、谷間を石垣で埋め、水門を設け、内部には倉庫などの礎石建物を配置した朝鮮式の山城であった。九州北部を中心に分布する、山腹や丘陵に数キロメートルにわたって切石の列をめぐらすいわゆる神籠石も、やはりこの時期に造られた防衛施設であろう。

これらの防衛施設の築造を指導したのは、白村江の戦いののち倭国に亡命してきた、兵法に詳しい百済の王族・貴族であった。天智四（六六五）年、大野城・基肄城を造るために筑紫に派遣されたのは憶礼福留・四比福夫という二人の百済人であったが、このうち憶礼福留については、『日本書紀』天智十年正月条に、「兵法に閑へ



図5 水城（中央）と大野城（背後）
九州歴史資料館編 2009『水城跡』より転載



図6 福岡県御所ヶ谷神籠石
行橋市教育委員会 2006『史跡 御所ヶ谷神籠石Ⅰ』より転載

り」と記されている。百済の王族・貴族は、これらのほかにも、集団的な用兵や戦闘の指揮など、各方面にその能力を発揮し、天智朝の軍事的諸施策を指導したと思われる。

大野城や基肆城の場合とは異なり、鞠智城については『日本書紀』に築城に関する記述が見られない。しかし発掘調査によれば、鞠智城はまさしく大野城・基肆城などと共通する朝鮮式山城としての特徴を備えている。平成二十（二〇〇八）年度の発掘調査で、貯水池跡から7世紀後半と推定される青銅製の百済系菩薩立像が出土したことは、鞠智城の築造にも百済人の技術者が関わっていたことを示唆するものではあるまいか。

三 西海道の行政・軍事と鞠智城

鞠智城の築造は、七世紀後半の東アジアの緊迫した情勢の中で行われたと考えられるが、その後東アジアの情勢は、唐・新羅・日本の関係としてしだいに安定の方向へと向かった。国内では六七二年の壬申の大乱後、乱に勝利した天武天皇によって中央集権国家の建設が強力に推進され、大宝元（七〇一）年には国家制度の基本を定めた大宝律令が制定された。

律令制のもとで、九州⇨西海道の行政は大宰府によって統括された。西海道では他の諸道とは異なり、大宰府による強力な権力集中のシステムが構築されたのである。大宰府は外交・軍事にも携わり、財政の面でも、西海道諸国の調庸はすべて大宰府に集積され、その一部が都に貢上されることになっていた。

西海道には、大宰府を中心とする交通・通信のネットワークが形成されていた。西海道の駅路は大

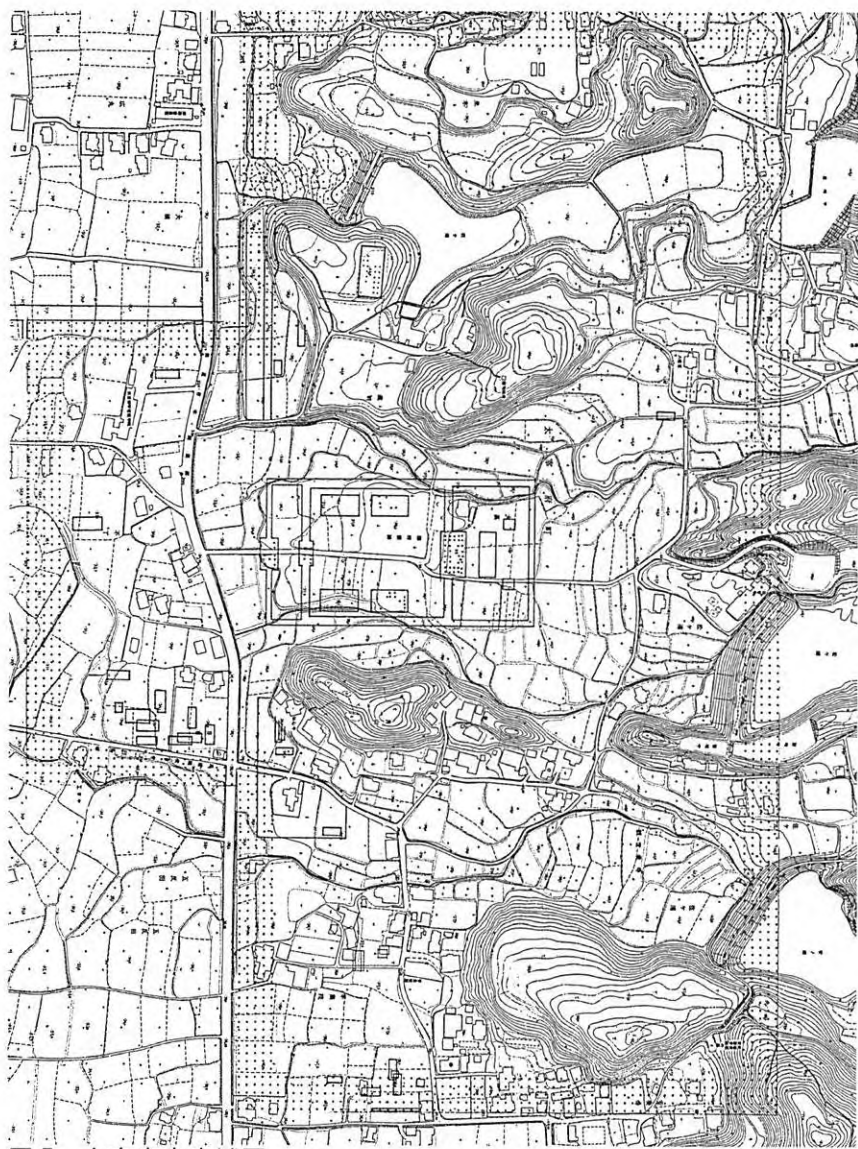


図7 大宰府府庁域図

石松好雄 1983「大宰府庁域考」『九州歴史資料館開館十周年記念
大宰府古文化論叢 上巻』吉川弘文館 より転載

宰府を中心に諸方面に向かう形で形成され、駅路に沿って駅家のほか、郡家や諸官衙施設が計画的に配置されていたことが推測される。

情報伝達の手段としては、烽が各所に設置された。烽は敵の襲来や外国使臣の到着などの情報を速達するための通信システムで、天智天皇三（六六四）年、防人とともに対馬・杵岐・筑紫に設置された。律令制では四十里（約十八キロ）ごとに設置され、昼は煙、夜は火を上げて合図を送った。『続日本紀』によれば、天平十二（七四〇）年の大宰小貳藤原広嗣の乱にあたり、広嗣は烽火を挙げて国内の兵を集めたという。大宰府管内の烽は、諸国の烽が延暦十八（七九九）年に停廃された後もなお存続した。烽は見晴らしのきく山頂などに設置される。また「火の山」「日の隈山」などの遺称が存在することから、その所在地を推定することが可能である。天平五（七三三）年編纂の『出雲国風土記』には、各郡に設置された烽の名称とその位置とが記載されており、豊後・肥前二国の『風土記』にも、烽の総数と郡ごとの数とが記載されている。肥前国（佐賀県・長崎県）では、現地調査や地名の研究によって、烽の所在地や国府・基肄城に至る情報伝達のルートの推測がなされている。鞠智城においても付近に「火の岡山」があり、やはり情報伝達のシステムの中に組み入れられていたことが推測される。

西海道防衛のための軍勢力としては、まず防人が挙げられる。防人は白村江の戦いの直後、天智天皇三（六六四）年に対馬・杵岐・筑紫に設置された。律令制のもとでの防人は諸国軍団兵士の中から選抜され、三年交替で筑紫に派遣された。その数は二〇〇〇人から三〇〇〇人に及んだと推測される。八世紀を通じて、防人のほとんどは東国Ⅱ中部・関東地方出身の兵士であった。東国の兵士はその勇敢さを買われ、鎮兵として東北の戦乱の鎮圧にも動員されたから、その負担は大きく、八世紀の後半

には防人制の維持はしだいに困難になった。天平宝字元（七五七）年、東国防人は停止され、西海道七国の兵士一〇〇〇人が替わって辺防の任に当たることとなった。その後も東国防人は大宰府の数度の要請にもかかわらず復活されず、大宰官内に残留している防人を徴発するなどの対応が行われたのみであった。延暦十四（七九五）年、杵岐・対馬を除いて防人は廃止され、同二十三（八〇四）年には杵岐の防人も廃止されている。

防人がどこに配置されたかについては、詳しくは分からない。サキモリは「前守」「崎守」の意味であり、最前線の海岸を守衛するのが本来の任務であって、それは天智三（六六四）年に対馬・杵岐に最初に設置されたことから窺われる。防人が最後まで配置されていたのも対馬であった。佐賀県唐津市の中原遺跡から近年出土した木簡に「甲斐国〔津〕戌〔人〕」とあるのは、甲斐国出身の防人が肥前国の港湾の守衛に当たっていたことを示すものと考えられ、防人配置の具体例を示すものとして貴重である。

鞠智城に防人が配備されていたかどうか。七世紀後半の築城当時には配備されていた可能性もあるが、本来の防人の任務から見て、また防人制の維持がしだいに困難になっていった情勢から考えて、八世紀以降の鞠智城守備の武力の主体は防人ではなく、西海道出身の軍団兵士と見るのが妥当なように思われる。

軍団の兵士は律令制国家の武力の主体であった。二十歳以上の男子を一戸から三人に一人の割合で兵士に徴発し、近くの軍団に勤務させるもので、一軍団には普通一〇〇〇人の兵士が所属していた。

西海道については、『類聚三代格』所載の弘仁四（八一三）年八月九日の太政官符によって、当時

筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後計六国に十八の軍団があり、一万七一〇〇人の兵士が所属していたことが分かる。軍団兵士の定数は奈良時代の養老三（七一九）年に削減されているから、おそらく軍団数十八、兵士一万八〇〇〇人というのが西海道の本来の姿であろう。天平十二（七四〇）年の藤原広嗣の乱にあたり、朝廷は東海・東山・山陰・山陽・南海五道の兵一万七〇〇〇人を徴発しているが、これは広嗣が動員するであろう大宰管内の兵士の数を考慮してのものであったかと思われる。

西海道の具体的な軍団名としては、遠賀（筑前）・御笠（同）・基肄（肥前）・益城（肥後）各団の名が諸史料によつて知られる。福岡県太宰府市からは「遠賀団印」「御笠団印」の印面をもつ印が出土した。また肥後国益城団の名は、昭和五十九（一九八四）年に平城宮跡から出土した「肥後国第三益城軍団養老七年兵士歴名帳」と書かれた木簡（題籤軸）によつて知られるものである。

鞠智城と軍団との関係についてはどのように考えられるのか。筑前国の御笠団については大野城、肥前国の基肄団については基肄城との関係がそれぞれ考えられる。これら山城付近の軍団に所属する兵士は、日ごろ軍団で訓練を積むとともに、番を作つて城の警衛に当たつたのであろう。それから類推すれば、鞠智城の場合にも、付近に軍団が存在した可能性がある。前掲の弘仁二年太政官符によれば肥後国の軍団数は四であり、平城宮跡出土木簡には「肥後国第三益城軍団」とあるのであるから、肥後国北部の玉名・山鹿・菊池三郡のどこかに、少なくとも一つの軍団はあつたのではないかと思われる。

これらの軍団は、兵士を率いて交替で鞠智城に勤務し、その守衛に当たつたほか、国司のもとでさまざまな任務に従つたものと考えられる。『日本紀略』弘仁四（八一三）年三月辛未条で、肥前国基

肆団の校尉が五島に來着した新羅人を捕らえる仕事に当たっているのは、その一つの例であろう。

《平城宮跡出土の肥後国軍団關係の木簡》

昭和五十九（一九八四）年、平城宮跡から「肥後国第三益城軍団養老七年兵士歷名帳」と書かれた木簡が出土した。これはいわゆる題籤軸で、巻物の巻軸の端にその文書の内容を記したものである。養老七（七二三）年に肥後国益城軍団に所属した全兵士の名簿で、肥後国から中央の兵部省に報告され、保管されていたものが、年が経って廃棄され、紙は反故として再利用され、巻軸のみが廃棄されたものであろう。

軍防令には、兵士以上については歷名簿二通を作り、どこに勤務しているか、貧富の程度は上中下いずれかを明記して、一通はその国に留め、一通は毎年朝集使に付して兵部省に送るようにと定めていた。征討などの場合には、国司はこの名簿によつて兵士を動員する。天平六（七三四）年八月に作成された出雲国計会帳によれば、同五年十月二十一日、「兵士簿目錄一卷・兵士歷名簿四卷」が朝集使に付して都に進上されている。当時の政府が兵士一人ひとりの名まで把握していたことを示すものである。

この木簡では「肥後第三益城軍団」と、軍団に番号を付して呼んでいる。個々の軍団に番号を記した例は他にはない。岩手県胆沢城跡出土の第四三・四四・四五号漆紙文書は陸奥国柴田郡關係の兵士歷名簿の断簡と推定されるが（平川南「胆沢城跡第四五次調査出土漆紙文書」）、ここでは「高椅郷廿五戸主刑部人長戸口」というように、諸郷の各戸にそれぞれ番号を付している。軍団に番号を付し、郷

内各戸に「戸番」を付すという、これらがいずれも軍団・兵士関係の史料であることは注目すべきで、迅速・的確に兵士を徵発する便宜として、広く行われていたことかと推測される。

おわりに

西海道は日本と東アジア世界との接点として、八世紀から九世紀にかけてもいくどか緊張した事態に見舞われた。日本と朝鮮の新羅との間にはしばしば衝突がおり、天平宝字三（七五九）年から同六年にかけては、安史の乱による唐朝の混乱に乗じて新羅に軍を送る計画が藤原仲麻呂（惠美押勝）によつてなされ、兵士や水手・船舶の大規模な動員が行われた。九世紀に入ると国家の統制力が衰え、朝鮮・中国との間の人や物資の交流が盛んになるが、飢饉や内乱による新羅国内の動揺から、九州沿岸には海賊がしばしば襲来し、沿岸の警備が大きな課題となった。寛平五（八九三）年には新羅の海賊が肥後国飽田郡を襲い、民家を焼く事件を起こしている。

しかし東アジア全体の視点から見ると、唐を中心とする東アジアの政治的秩序は九世紀に入つて崩壊し、諸国家はそれぞれ内部で動揺を抱え、国家間の激しい抗争は起こらなくなった。それに対応して日本でも、八世紀末には軍団兵士制が辺要を除いて廃止され、防人制も九世紀に入つて衰退した。鞠智城は九世紀に入つても古代山城としての機能を保持したが、土塁や石垣で防備を固めた朝鮮式山城の存在意義は、しだいに失われていったものと思われる。

鞠智城に関する九世紀の史料の多くは、武器庫の鼓や戸がひとりでに鳴ったり、火災が起きたり、屋根に葺いた草を鳥が喰いちぎったりというような、怪異に関することである。そのことは当時の鞠

智城やその倉庫群が、肥後国にとって一つの象徴的存在となっていたことを示している。

八世紀末以降、東北地方や関東地方ではいわゆる正倉神火事件が頻発し、政府はそれへの対応の一環として、旧来の倉庫群とは別の地に新たに倉庫群を建設する政策をとった。東北地方には三十三間堂官衙遺跡（宮城県亘理郡）・東山官衙遺跡（宮城県加美郡）など、丘陵上に郡庁院・倉庫群を配する平安時代前半の官衙遺跡がしばしば見られる。この時期、肥後国においては、軍事施設としての鞠智城の庁舎や倉庫群が、菊池郡家の政庁や正倉としての機能をあわせ持つようになっていたのではあるまいか。文献に鞠智城のことを「菊池郡城院」、その倉庫を「菊池郡倉」と称していることは、九世紀の鞠智城がこの地域の行政の中心としての役割をも果たす存在になっていたことを示しているように思われる。

〔参考文献〕

- 『北九州瀬戸内の古代山城』（『日本城郭史研究叢書』一〇） 小田富士雄編 一九八三年 名著出版
『西日本古代山城の研究』（同二三） 小田富士雄編 一九八五年 名著出版
『烽（とぶひ）の道』 シンポジウム「古代国家とのろし」 宇都宮市実行委員会他編 一九九七年 青木書店

『古代日本の交通路』Ⅳ 藤原謙二郎編 一九七九年 大明堂

『西日本の古代山城』 磯村幸男 『古代国家の形成』（『史跡で読む日本の歴史』3）所収 森公章編

『熊本県史 総説編』 原田敏明他監修 一九六五年 熊本県

『熊本県の歴史』(県史シリーズ四三) 山川出版社

『熊本県の歴史散歩』(全国歴史散歩シリーズ四三) 山川出版社

『九州古代中世史論集』 志方正和 一九六七年 志方正和遺稿集刊行会